

2A-100

149  
595

新撰小倉百詩  
完



千秋小倉山莊之

佳什

萬古滿米老翁之

麗詞

揚羽蝶叟寅敬題



片桐滿米翁肖像

自序

特52  
216

余生長信陽三十遊東都六十歸鄉自今欲學詩歌  
 連俳而不求師也。以書籍為師經歷六十有六秋多  
 見世人其材蓋各有分。有上有中。有下。余自知不上  
 不下。而在其中間也。上者有上樂。中者有中樂。下者  
 有下樂。余乃欲取中間之樂而樂之。頃者翻小倉百  
 人一首之歌。意以賦百首之七絕。始無法也。蓋從法  
 而入。從法而出。能以無法為有法。則果得真詩之道  
 耳。今余以無法賦此詩。而供後人之覽。誰復笑之耶

信陽

滿米片桐美識





叙

滿來翁賦百人一首詩、携來示余、且請辨好惡、加剗  
削、余謂翁曰、古人三易其稿、猶琢磨拱璧、發揚輝光、  
何其勤也、今翁已千錘萬鍊、其用力也、蓋不甚減古  
人、然復去而更千錘萬鍊、亦殊為不惡、翁如領之者、  
居數日、又携來示之、余開卷熟讀、喟然歎曰、有是哉、  
好者全存、惡者已削、乃可謂完璧矣、嗚呼翁之好學、  
殆幾乎古人、孰謂今人不如古人哉、  
時明治戊子十一月寒甚墨凍呵筆纔書

天智天皇

秋乃田のかりほの庵のこまをわらみ我衣手の露にぬれつ、

山田秋滿稻梁肥、好結假盧依翠微。  
聖帝親知民疾苦、苦踈何耐露沾衣。

持統天皇

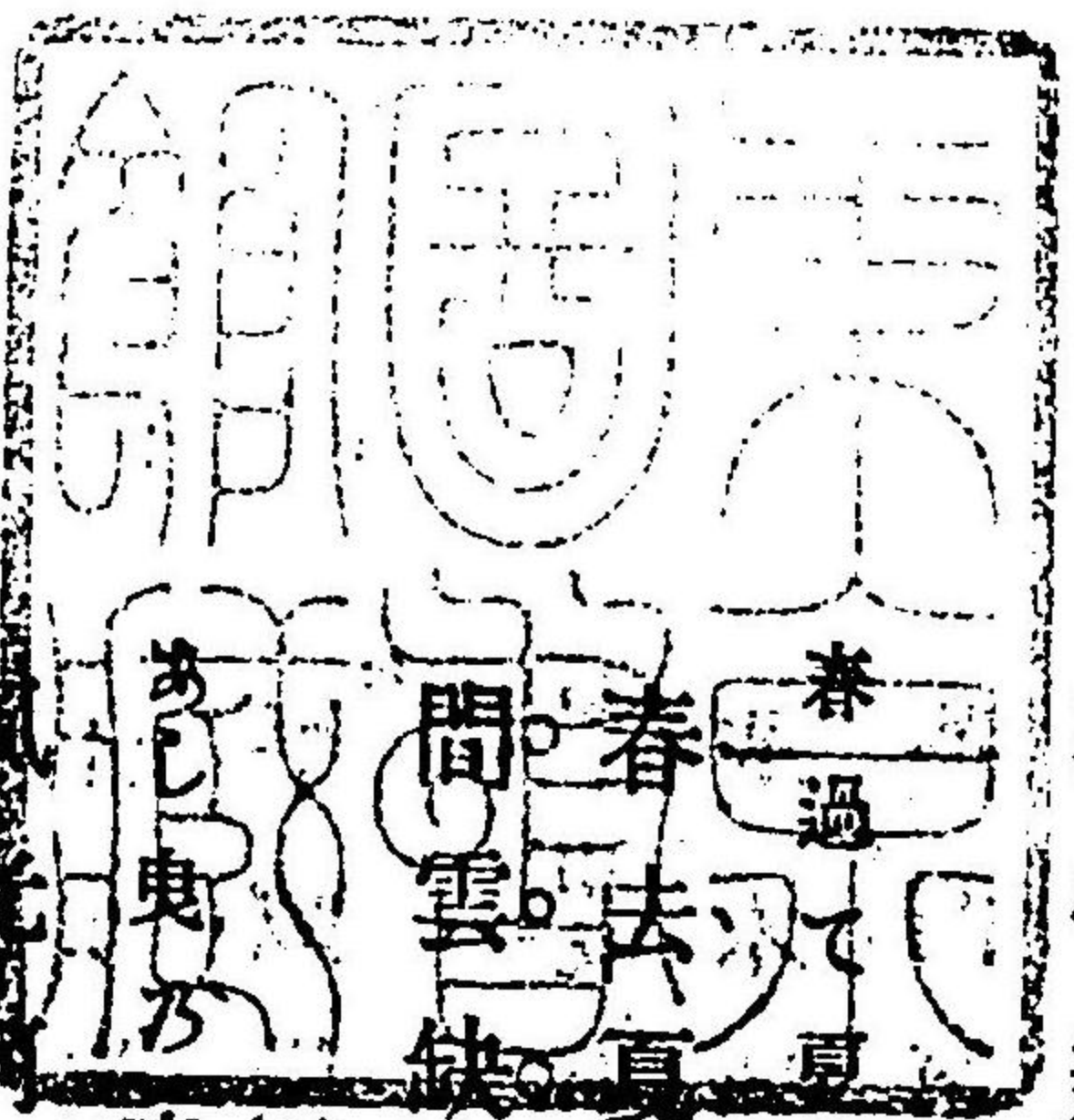
春過て夏きたにけらし白妙乃衣はすてふ天のゝく山

春去夏來望翠鬢、峯前峯後似仙寰。  
問雲缺處皚々日、歲個曝衣香久山。

柿本人丸

あし東乃山どりの尾のまたりをの長く一夜を獨りかも絲か

風光何處瑞雲通、峻尾偏長后苑中。  
有約不來孤枕冷、殘燈淺夢示宵空。





山邊の赤火車  
田子の浦にうち出て見れば白妙のふしは高嶺にゆきはふりつ、

日々朝々獨坐閑  
放眸田子浦雲間  
平敷崇頂皚々雪  
三面遙看富士山

猿丸大夫  
おく山に紅葉ふみとけなく鹿の聲さくときう秋はかなし

萬木連娟紅葉成  
碧天涼冷片雲輕  
柴門第屋幽閑處  
切々悲秋麋鹿聲

中納言家持  
鶺鴒のこたせる橋にをく霜の白きを見れば夜とふけにける  
踈雲晴景素秋天  
月落鳥鳴霜滿天

鳩鵲橋邊瞻望處  
皎々如練五更天

安倍仲磨

天の原ふりさけ見ればかすがなる三笠は山にいてし月も  
天原遙隔久淹留  
日夜蕭條待渡舟

三笠山頭新月出  
遙々憶是故郷秋

喜撰法師  
わが庵の都乃たはみしかろすむ世をうち山と人はいふなり  
喜撰法師  
新歌吟詠定何邊

帝都異位地幽絶  
宇治山居人稱仙

小野小町

花の色はうはりにけりないたつらにわ我身よにふるなかめせしまに  
年々歳々在塵寰  
春日徒看花滿山  
偏惜艶花終減色  
我身經世暫時間



蟬丸

こまやこれ行もかへるも別れてはまるもしらぬも何坂れせき  
長見行人幾往還 浮雲以外樂清閑  
蟬丸傳得琵琶曲 知巳火窺逢坂關

和田の原八十嶋かけてこた出ぬと人にはつけ、あまの釣所  
唐渡難成獨自羞 參議篁氏倚蘆洲  
和田原外過千島 憑汝告人蟹釣舟

天津風雲のかよひ吹きとちよ乙女のすかた志はしと、めい  
舞隊歌班燭影稠 僧正遍照  
天風若閉雲衢得 乙女好姿將暫留

陽成院

つ人はね乃峯より落るみな川の戀うつもりてふちとなりぬる  
筑波山上白雲連 山下迢々皆野川  
日暖風恬黃鳥囀 春情堆積水成淵

みちのく乃まのふもちすり誰ゆへにみたれそめにし我ならなくよ  
奥陸貢來文字研 青々忍葉最堪憐  
秋風千里無書信 擾々紛々意慘然

光孝天皇

君かため春の野に出てわのなつむわか衣手に雪はふりつ、  
爲君春野酌金缸 又望茫々鷗鷺雙  
白日青天香菜摘 須叟袖角雪頻降



中納言行平

立別れいなほの山にみねに生ふる松とまきかひ今かへりこん

行平郷去祖庭開 遙聽秋聲雙淚催

稻葉山中入訪少 松風復憶此歸來

在原業平朝臣

千早振かみよもきかき立田川うらくれなひに水くゝるとは

神代曾無此色鮮 溪間美景立田川

水浮楓葉韓紅錦 織出人間艶絶天

藤原敏行朝臣

住乃江乃さしによる波よるさへや夢のかよひし人先よくらん

打岸波濤漲住江 秋聲肅颯入飛艘

深情一覺通宵夢 隱々無端對曉窓

伊勢

難波かたみしのきあまのふしれまもあわて此世をすこしてよとや

白浪清瑩閃曉曦 難波瀉上遠帆歎

堪憐蘆節間方短 歲月迢々奈別離

元良親王

わひぬれと今ばたかたし難波ある身をつくしても逢はんとぞ思ふ

元良親王倚綺籠 千里春風信自通

誰道難波幽靜地 伊人未遇恨何窮

素性法師

今こんといひしはかりよ長月乃あり明乃月をまらひゆるかな

有約待人々未來 此情此夜兩悠哉

雲山鬢鬚東方日 殘月蕭然恨更催



文屋康秀

吹からに秋れ草木のまほるればむへ山風をあらしといふらん  
風吹秋草木梢空  
曠野平原唧々虫  
四望翩々多落葉  
也知暴虚是山風

大江千里

月みれば千々ふものころのなしけれ我身ひとつれあきにはあらぬ  
大江千里月前舟  
秋色茫茫易起愁  
楓葉染霜紅片々  
蕭條不獨我身秋

菅家

此度はぬさもとりあへず手向山紅葉のにしき神のまに  
千里金風万景閑  
彩雲深處似仙寰  
峯前峯後紅楓錦  
奉幣神檀手向山

三條右大臣

なにしおは、大坂山のさきかつら人にしらまてくるよしもかな  
曉風殘月惱吟肝  
逢坂山阿倚檻看  
最是眞蘿千古色  
雲間淨碧帶霜寒

貞信公

小倉山みねの紅葉ハ心あふはしま一度のみ幸またなん  
碧天晴景翠微中  
遠望颼々落葉風  
要待重來行幸日  
小倉山上幾株楓

中納言兼輔

みかた原をきてなかる、泉川いつみきとてか戀ひしかるらん  
麟沸三原涌裔流  
泉河漫々月光浮  
秋風千里羽鱗信  
匹似春情別後愁



源宗行朝臣

山里は冬ろさひしさまさりけり人めも草もかれぬと思ふは  
晴。空。霜。落。更。無。颼。  
山。里。皚。々。重。疊。雪。  
日。月。光。搖。次。第。移。  
遊。人。已。絕。草。枯。萎。

凡河内躬恒

心あてに折ハやからん初霜乃ふきまとはする白菊の花  
落。葉。晴。天。市。外。家。  
新。霜。似。雪。庭。園。裏。  
月。光。如。水。曉。寒。加。  
欲。剪。猶。迷。白。菊。花。

壬生史峯

有明乃ほまなく見えし別よりあかつたはかりうさものはなし  
秋。風。吹。起。四。山。晴。  
遠。近。雞。鴉。報。曉。鳴。  
殘。月。流。西。光。淡。々。  
依。然。離。別。々。愁。生。

坂上是則

移さほらけあり明の月と見るまてによしの、里にふれる白雪  
坂。上。是。則。歌。會。列。  
一。詞。朝。朗。吟。聲。烈。  
看。來。做。月。復。何。疑。  
芳。野。里。中。堆。白。雪。

春道列樹

山川に風乃かけたるしからみはあへぬもみちなりけり  
落。葉。翩。々。萬。岸。秋。  
淑。溲。波。浪。畫。舟。浮。  
水。中。保。障。山。川。柵。  
錦。繡。風。懸。一。半。留。

紀友則

久かたれ光れとけき春の日にしつゝろなく花のちるらん  
久。方。光。日。鳥。聲。和。  
數。樹。山。櫻。發。滿。柯。  
恨。殺。陽。春。無。靜。意。  
落。花。片。々。奈。渠。何。



藤原與風

誰をかもしる人にせん高砂乃松も昔乃友ならなくに  
誰識高山十八公  
相生貞幹妙天工  
青山不改舊時客  
白髮重來一夢中

紀貫之

人のいさ心もしらすふる里は花そむかしれ香に匂ひける  
日暖風清草滿塘  
材鶯啼處動晨光  
去來不識園梅綻  
故土花留昔日香

清原深養父

夏乃夜はまたよひなからあけぬるを雲のいつくに月やとるらん  
夏夜宵闌動曉風  
登樓遙望月昇東  
白雲深處須臾際  
月宿長天雲霧中

文屋朝康

白露に風のふきまき秋の野はつゆぬきとめぬ玉を散りける  
竹裏新亭草際扉  
曉天遙望尸南歸  
金風吹起過秋野  
行露玲瓏白玉飛

右近

身をば思はずかひてし人の命のをしくもめる哉  
我被人損寧願身  
誓言今背奈欺神  
殘粧和淚秋風夕  
偏怕他家引惡因

參議等

あさちふの小野れ篠原志のふれどあまりてなとか人の戀しき  
快晴朝路鳥頻鳴  
清露團々愁意生  
小野篠原偏寂寞  
暮人繕繕不堪情



忍ふれど色に出にけり我戀は物やれもふと人のとふまで  
暑往寒來歲月遷 深沈春色百花天  
相思却被他人問 難奈中情自顯然

戀すてふ我名いまたき立にけり人しきことをもひそめしか  
紫微官女巧安排 昨日今朝願已諧  
隱々冥々人已識 纏綿情緒在中懷

ちさりきなみたみに袖をしほりつゝ末の松山なみとさしとは  
翠娥紅粉濕羅裳 了得薰風滿袖涼  
東海縱揚千里浪 末松山豈見滄桑

蓬見て乃後れ必にくらふればむかしはものを思ひさしけり  
中納言敦忠

相見相逢興可乘 別離今日戀情増  
后心其奈方如此 昔日非逢恨未會

逢ふよとの絶てしきくの中く人にをも身をも恨みさらまし  
中納言朝忠

相逢無絶那無親 會上蓬萊非苦辛  
流水清澄秋月夕 離秋何必恨他人

あれどもいふへき人はおもはへて身ゆいたはらになりぬへきかな  
謙徳公

意中人已遠分離 俯仰蕭條無限思  
雲慘烟愁初月夜 白衣顛顛獨傷悲



ゆら乃戸をわたる舟人のちをたへ行衛もしらぬこひの道か  
匹似由良渡口迷舟人正惱浪高低  
不知蹤跡終何處戀々情思渺々兮

惠慶法師

八重むくらししけるやとのさひしさに人ふる見へぬ秋は來にけり  
高臺含霧幾崔嵬落日風聲不耐哀  
藻繡重々蓬屋寂不知今歲又秋來

源定則之

風をいたみ岩うつなみのおのれのみくたけてものを思ふころかな  
滿腔愁悶頃來情自慰纔忘隨又生  
正是波濤千里水岩頭碎去亂縱橫

大中納能宜朝臣

みかきもり衛士のたく火は夜はもへてひるはきへつもれをこころ思へ  
庭中爲列到深更衛士股勤公務成  
爛々煌々焚盡火天邊彷彿曉鴉聲

藤原義孝

君かためおしからざりま命さへなのくもかなと思ひけるかな  
片々翩々夢幻身爲君還是慕靈椿  
相思相想幽窓下却病延年默禱神

藤原實方朝臣

のくどたにえやいふさのさしもくさしもまらしなもゆる思を  
萬嶽千峯閃曉曦秋來黃葉忍吾思  
戀情生處誰能慰心火焦胸他未知



藤原道信朝臣

明。照。れ。は。く。る。も。乃。ど。は。ま。り。な。か。ら。な。は。う。ら。た。し。き。朝。ほ。ら。け。哉  
朝。日。晴。來。瑞。氣。和。夕。陽。堪。惜。又。空。過。  
人。間。偏。恨。閑。房。裡。曉。別。蕭。條。情。更。多。

右大將道綱の母

な。け。き。つ。獨。り。ぬ。る。よ。乃。明。る。ま。は。い。か。に。久。し。た。も。乃。と。の。こ。し。る。  
嘆。嗟。深。殿。臥。空。牀。終。夜。沈。々。獨。自。傷。  
微。月。朧。明。難。作。睡。蕭。然。偏。覺。漏。聲。長。

儀同三司母

わ。す。れ。し。の。行。末。ま。て。は。難。け。れ。と。け。ふ。を。か。き。り。の。命。と。も。か。な。  
情。契。難。忘。夢。裏。遊。今。來。早。省。後。來。愁。  
自。憐。霜。露。清。涼。夕。却。望。黃。泉。々。下。秋。

大納言公任

漣。乃。音。は。た。へ。て。久。ま。く。き。り。ぬ。れ。と。名。こ。う。な。か。れ。て。猶。き。ふ。へ。け。れ。  
瀑。聲。間。絶。鳥。成。群。郁。々。萋。々。万。草。薰。  
別。有。人。間。無。盡。物。佳。名。遠。々。萬。年。聞。

泉式部

あ。ら。さ。ら。ん。此。世。の。外。乃。思。ひ。出。よ。今。一。た。ひ。の。あ。ふ。よ。し。も。か。あ。  
纒。保。餘。生。是。此。躬。秋。雲。千。里。月。濛。々。  
困。哀。臥。病。深。閨。裏。只。願。相。逢。說。寸。衷。

紫式部

め。く。と。あ。ひ。て。見。し。や。う。れ。と。も。わ。か。ぬ。ま。ふ。雲。か。く。れ。に。し。夜。半。の。月。哉。  
遯。遁。相。逢。百。不。聞。參。差。樓。閣。正。宵。分。  
裳。衣。涼。冷。無。端。別。天。半。依。微。月。匿。雲。



大貳三位

有馬山いなよ、原風ふけはいてろよ人そわまやほする  
南風吹盡無清息。猪名原上獨彷徨。

赤染右衛門

やすらわてねなましも乃を小夜ふけてかたおくまての月をみしかな  
滿耳。淒々蟋蟀聲。高樓不寐到深更。  
遙望秋景窓。攏際。正是西山月欲傾。

小式部内侍

大江山いくの、道乃とうければまたふもみす天のはし立  
心意蕭々獨自嘆。大江山嶺道曠々。  
遠程難訪天橋立。錦字未來安得看。

伊勢大輔

古のならの都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるのな  
雅人遊樂日相從。寧樂古都佳氣濃。  
重瓣櫻花香馥々。九重宮裏着嬌容。

清少納言

夜をこめて鶏のうら糸いはかるとも世にあふさかればせきはゆるさし  
夜半幽閨戀悶顔。夢魂幾度踏辛艱。  
鶏鳴縱擬田文計。豈可輕々許出關。

右京太夫道雅

今は名、思ひたへなんどはかりを人つてならて言ふよしもかな  
紫門茅屋幻泡身。抱膝燈前獨惜春。  
月照山中吾思絶。積憂安得告伊人。



權中納言定頼

あきほけうちれ川きりたるくにあらまじたる瀬々の綱代木  
曉色朦朧兩岸間 宇治川霧掩江灣  
溶々一水扁舟泛 膳所城邊綱木斑

相摸

うらみわひはぎぬ袖たにあるも乃を戀にくちぢん名こそおしけれ  
風動檐鈴駒聒聲 瀟湘燈下苦心生  
深宵暗淚沾衣袖 還惜空羸薄倖名

大僧生行尊

もろともにあわれと思へ山櫻花より外よまゑる人もなし  
東風千里碧空新 白日青天萬國春  
數樹山櫻知我否 世間了少會心人

周防内侍

春の夜の夢はのりある手枕にうひなく立ん名こそおまけれ  
新雨廉纖淑氣融 花香馥郁畫欄東  
相逢春夜空濛夢 躊躇魂迷小院中

二條院

心よもあらてうき世にならへはこひまかるへさ夜半の月哉  
暗々明々次第晴 竹林風嘯夢難成  
蟲聲新透蕭々夜 門外憐看月影明

能因法師

嵐ふくみひろの山の紅葉はまの川のにしきなりけり  
忽然風起夕陽天 御室山頭景色鮮  
紅緑丹黄楓葉艶 波間如錦立田川



良還法師

きひしさに宿を立出てなかむればいつくもかなし秋乃夕くれ  
山風吹盡古林邱 忽聽猿聲生暗愁  
天地人間歸寂寞 晚來黃葉滿天秋

大納言經信

夕きれは門田のいなはをとつれてあし乃まろやに秋風そふく  
夕陽前旬聒鳴蟲 稻葉萎々歳已豊  
月色江聲侵枕席 蘆丸屋又起秋風

祐子内親王家紀伊

音にさく高しの濱のわたなみのかげまや袖のぬきもころきれ  
無瑞逆浪濡雙袖 春景盈々夕日曛  
萬里河聲不忍聞 高濱潮去白鷗群

前中納言匡房

高砂の尾上のさくらさきにけり外山のかすみ立たすもあらん  
高砂峯上放櫻花 終日同遊人語譁  
谷々溪々香馥郁 他山霞靄奈欄遮

源俊賴朝臣

うりける人を初瀬の山おろしはけしかれとは祈ふぬものを  
萬頃雲中引杖尋 烈風吹落碧陰深  
真心善禱隨縁福 初瀬山靈觀世音

藤原基俊

ちりたさしなせもか露を命にてあわれこと乃秋もいぬめり  
盡心猶憶與心謀 法會講師要自求  
歳々年年仁惠外 悵然今歳送三秋



法性寺入道前關白大政大臣

和九乃原こきいてみまは久かたの雲井にまかふおきつしらなみ  
渺々茫茫舟路長。晴風度處望空洋。  
接天蒼海欲同色。濤漲滾々白浪揚。

崇徳院

瀬をいよみ岩にせかる。瀧川のこれても末にわいんとそ思ふ  
峯前峯後雨痕濃。寂々寥々翠霧封。  
一水觸岩千里別。也期流去復相逢。

源兼昌

あはち鳥かよふ千鳥のなく聲にいくよほさめぬすまの關守  
宵々度水五更風。千鳥聲々淡路通。  
聒耳紛々殘夢覺。須麻關吏懶眠中。

左京大夫顯輔

秋風にたなひく雲の絶へ間よりもれいつれ月れ影のさやけさ  
木落晴天蟋蟀聲。高山遙望覺寒生。  
秋風吹破松窓夢。月在浮雲踈處明。

待賢門院堀川

なからへんふ、ろもしらすくろかみのみたれてけさいものをこそ思へ  
幾夜秋風苦隔離。夢中相遇不多時。  
誰知吾意延黔髮。蓬乱今朝更倍思。

後徳大寺左大臣

ほどいさすなきつるかたをなかむればた、有明の月そのこれる  
一夢濛朧已五更。綠陰深處杜鵑鳴。  
長空々々望無餘影。殘傾月西一點明。



道因法師

おもひわひさては命あるものをうきにたへぬは涙なりけり  
展轉相思窈窕娘 一宵清話想難忘  
松窓深處秋風夕 獨在空闌淚數行

皇太后宮太夫俊成

世の中よみちこそなけれ思入る山の奥にも鹿うなくある  
秋色蕭然淡靄横 遙々山路旅裝輕  
高人嘉遁尋行處 也聽深山麋鹿聲

藤原清輔朝臣

なからへはまたこれころやしのはれんうしとみし夜は今は戀志き  
凜然朝夕鬢霜侵 擾々紛々不任心  
昔日歡娛無復跡 將來恐合不如今

俊惠法師

夜もすから物おもふころはわけやらて糸やのひまさへつれをかりけり  
終夜相思冷徹膚 紗窓夢覺聽啼鳥  
不知簾外如珪月 還照闌中到曉無

西行法師

なげとて月やは物を思はするのこち顔なる我ちみたかな  
秋月清光溢碧空 不堪吟斷恨何窮  
愁顔自是將流淚 寂々寥々茅屋中

寂蓮法師

村雨の露もまたひぬ楨の葉にさり立のはる秋の夕くれ  
連山遙望養幽情 雨霽彌高過雁聲  
楨葉庭前露猶遍 無端霧起立秋成



皇嘉門院別當

なには江乃芦のかりねの一夜ゆへ身をつくしてや戀をたるへき  
千里飛雲日已晡。難波江岸雁棲芦。  
寂然秋色情何限。偏戀深閨夢裡娛。

式子内親王

玉乃緒よたへきはたへねなかつへい志のふるることの上はりもする  
野田深處捲簾看。萬里遙知眼界寬。  
寂寞紗窓天又暮。夜來風雨獨方嘆。

殷富門院大輔

みせはそをしまの筵の袖たにもぬれにそぬれし色のかはらす  
雄島漁夫逆浪馴。意隨流水得金鱗。  
袖濡袿染猶佳色。千島遙看万目新。

後京極攝政前大政大臣

さうくすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき獨かもぬん  
蟋蟀喧啾蕙下鳴。夜來霜落足秋聲。  
柴門茅屋衣衾冷。也恐孤眠夢不成。

二條院讚岐

さかうてはしほひに見へぬ沖の石の人みそ知らねかわくほもなし  
潮于沖石尙難看。慘々憂情獨自嘆。  
髣髴音容空入夢。到頭吾袖不能乾。

鎌倉右大臣

世の中ハ常にもかもをなささこく海士の小舟れつなてかなしも  
世間總不似尋常。漕渚漁人泛小航。  
遠望翩々方一興。網罟引繩互爭強。



參議雅經

みよしの、山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり  
吉野山風夜幾更 満窓明月露華清  
無端到耳柴門外 萬戸凄然砧杵聲

前大僧正慈園

おほけなくうきよの民にればふかなわかつそまにすみそめれ袖  
比叡山中住翠微 智愚貧富諭懃歎  
了心金偈慈雲覆 欲度衆生穿黑衣

權中納言定家

來ぬ人をまははの浦の夕なさにやくやもしほの身もこかれつ、  
遠望青霞氣尙新 竹窓深處惜殘春  
翠松演上風吹盡 一段焦思夢幻身

入道前大政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならてありゆくものは我身なりけり  
樹抄齊飄滿砌風 短墻荒圃百花空  
遙看片片如紅雪 却憶身生與彼同

從二位家隆

風うよくさられ小川の夕くれははみそきそまつのまるしなりける  
奈良川上起微風 一葉桐飄萬里通  
所在秋聲無苦熱 滿天涼月入簾櫳

後鳥羽院

人もかし人もうらめしわちさなく世を思ふゆへにものおもふ身は  
鳳輦時巡戒不虞 聖皇偏憫萬民愚  
愛憎恩怨無窮事 憂世濛々奈此軀



順德院

百數やふるき軒端に忍ふにもなほあまらある昔をりけり  
 昔。日。巡。遊。白。鶴。翔。 尚。看。今。曉。舞。鸞。凰。  
 預愁明日浮沈世。 百首卷中一二皇。

跋  
 此百詩聞雲舍主人滿米翁所作也、詞句雅鍊、意旨該明、不艱不  
 澁、聲協韻諧、余嘗應其索、改竄數十字、恐亦渾沌穿窬、反戕其真  
 者耳、

明治戊子冬十一月

蠹魚間人

片桐翁畧傳

片桐滿米翁ハ長野縣伊那郡神稻村ノ産ニシテ祖先ハ六孫王經基公ノ御子下野守源滿  
 快朝臣ノ曾孫信濃國伊那郡ニ住ス爲公カ三男藏入太夫爲基ハシメテ片桐ト名乗ル伊  
 那郡岩間ニ居城ス其遠裔片桐宗三ヨリ十一代ノ孫武兵衛ノ長男ニシテ幼名片桐幹ト  
 稱シ七歳實母菊子ニ別レ繼母池田八重子ニ鞠育セラル八重子貞淑ニシテ訓導誘掖慈  
 母ニ劣ラス能ク讀書習字ヲ授ク少壯ニ及ヒ家貧ニシテ資産ナキヲ慨シ居常家ヲ興レ  
 業ヲ建ント期シ都門ニ遊ハント欲スルモ父母在スルハ遠遊セサルノ聖語ヲ守リ同郡  
 氏乘村醫師多田玄良ノ末女ヲ娶リ二男一女ヲ設ク其後父母遠逝始メテ素懷ヲ遂ント



嬰兒ヲ妻ニ托シ單身江戸ニ來リ備サニ辛楚ヲ嘗メ百折不撓終ニ淺草花川戸ニ來住  
 シ町用人トナリ名主代ヲ兼務シ大政維新ノ際町年寄トナル此皆平素品行方正人ニ接  
 シ事ヲ處スル周密謹嚴大ニ衆望ヲ博シ信任ヲ得タル所以ナリ爾後荏苒歲月ヲ經過シ  
 家産豊富郷里ニ田圃山林ヲ購得シ隣里屈指ノ資産家タリ然而シテ平素家訓勤儉毫  
 モ奢侈ノ風ナシ明治十三年六十一ノ春ヲ迎フ妻及男光太郎光太郎亦家聲ヲ擴張ス出京故山ノ風  
 月ニ老境ヲ慰養センコトヲ勸ム翁忻然其意ニ任セ其事務ヲ義子片桐萬兵衛ニ讓リ義子  
萬兵衛  
 衛衛頼富ヲ貯貯篋笠ヲ理メテ故山ニ皈リ吟詠自適風月ヲ樂ム嗚呼翁ノ如キ少壯刻苦勉  
 勵家ヲ興シ業ヲ就シ老年ニシテ快樂圓滿意ノ如クナラサルナシ亦古人ニ愧サル者ト  
 謂フヘシ其老後ノ述懐ニ此歌アリ人口ニ膾炙ス

月花をめてし名残ど知られけり

わの黒髪よ積る白雪

明治廿八年八月廿日

繞花園主人

大畑弘國識

定價金七錢

明治廿八年十一月一日印刷

全年 月五日出版

著者 信陽 片桐 滿 米

茨城縣

高崎 龍太郎

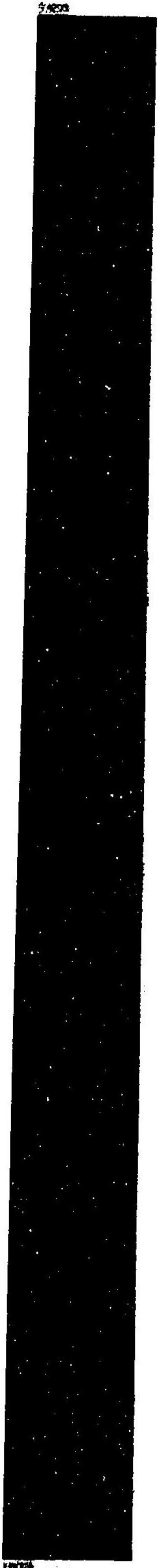
印刷兼  
出版人

東京市下谷區  
練堀町四十二番地



2A-100







新撰小倉百詩

国立国会図書館

098908-000-7

特52-216

新撰小倉百詩

片桐 満米/著

M28

DBV-1118

